



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「孫悟空が生まれた国」

『地球の歩き方』(ダイヤモンド・ビッグ社) というガイド・ブックをご存じだろうか。この本は1979年に創刊された。いわゆる自由旅行のバイブルのような本である。

わが輩が偶然にも旅行ヤの仕事をするようになったのが1977年であるから、すでに40年以上の月日が流れていることになる。

1964年に海外旅行が自由化され、徐々に自由旅行者が増えていった。といっても、1971年わが輩がヒッピーとなったころは、まだまだ不自由な時代であった。ドルの持ち出し制限があり、先輩の先輩(商社マン)にドルに換金してもらったため丸の内の商社までいったことがあった。ドル以上に困ったのは、旅の情報が全くと言っていいほどなかった。

わが輩をインドに送り出した“インド浪人”は、何を聞いても「な〜んとかなるよ」という楽観的アドバイスのみであった。

それでわが輩は益々不安になった。それなら長崎法潤教授を紹介してやろうか、と言われたが、ハイレベルのため今度はわが輩の方がビビった。

もっと旅に役立つ人を紹介してほしかった。それならば、インドから帰国した人を紹介してやろう、ということになった。このスピリチュアルな人に出会わなければ、わが輩は今頃違った人生を歩んでいたことであろう。

いろいろな経緯は省くとして、初めてボンベイの土を踏んだ時、わが輩は見た。市内中心部の路上に、チョーク・アートで大猿の絵が描かれていた。それは紛れもなく孫悟空の絵であった。それを見た瞬間、わが輩は大発見でもしたような気分になり、なぜか嬉しくなった。

通行人がその絵に向かって小銭を投げていく。アートに対する投げ銭という意味合いもあるが、大猿に対する信仰心によるものである。

この大猿の正体は、『ラーマヤーナ』物語に登場するハヌマーンと呼ばれる超人的な猿である。中国では『西遊記』に登場する孫悟空、日本では『桃太郎』に登場するサルに相当する。

学生時代は仏教、中国思想では特に『莊子』に興味をもっていた。大学に入ったとき、最初に読んだ本は『孫子』の兵法である。その理由は単純明快で、東京者の学友に議論で負けたくなかったからである。カミュの『ペスト』や、コリン・ウィルソンの『アウトサイダー』、サルトルなど、横文字を並べられると全くの負け犬であった。(浪速おとこも台無しだよ)

それで益々仏教にのめり込み、当時の若者としては珍しく、仏教月刊誌『大法輪』を愛読していた。もちろん『朝日ジャーナル』も左小脇にかかえていた。

インド思想についても殆ど知らなかった。それなのに、なぜインドに来てしまったのか。それはわが輩の前世のカルマ、運命としかいいようがない。

わが輩の学生時代、中国は文化大革命の時代であった。毛沢東や紅衛兵が世界を変えようと思っていた知識人や学生も多くいた。しかし、あれは権力闘争にすぎなかった。インドのカースト社会をみて、「インドこそ文化大革命が必要だ！」という若いカメラマンもいたが、わが輩は「インドは皆ばらばらだから革命はムリだ」と思っていた。

インドに足を踏み入れたあと、中国には全く興味がわかなかった。それに実際問題、あのころ中国は自由思想を好まぬ“鎖国”状態で、自由旅行ができなかった。それに比べてインドは“ばらばら統一”だから、ヒッピーを受け入れる度量があった。

最近の香港問題で明らかだが、中国には文句を言う“自由”がない。それに比べればインドには“言いたい放題”の自由らしきものがある。覇権主義と民主主義の違いである。わが輩流に言えば、神仏のいない実利主義中国と神さまいっぱい宗教大国インドの違いである。

人の行動は何かを畏怖することによって制限される。習近平を恐れて行動するか、神さまを畏れて行動するか、どちらが人間としての価値を高めることができるだろうか。また反習近平運動は成り立つが、神さま反対運動（反絶対的存在）は聞いたこともない。“反体制分子”は習近平から隠れて活動できるが、神さまから隠れて行為することはできない。有限と無限の違いである。

『孫子』の兵法を捨てて、インド哲学『バガヴァッド・ギーター』（神の詩）を選んだわが輩は、なぜか 1982 年中国に行くことになった。そこで何を見たのか。まず、なぜ中国に行くことになったのか、を次回語ろうではないか。